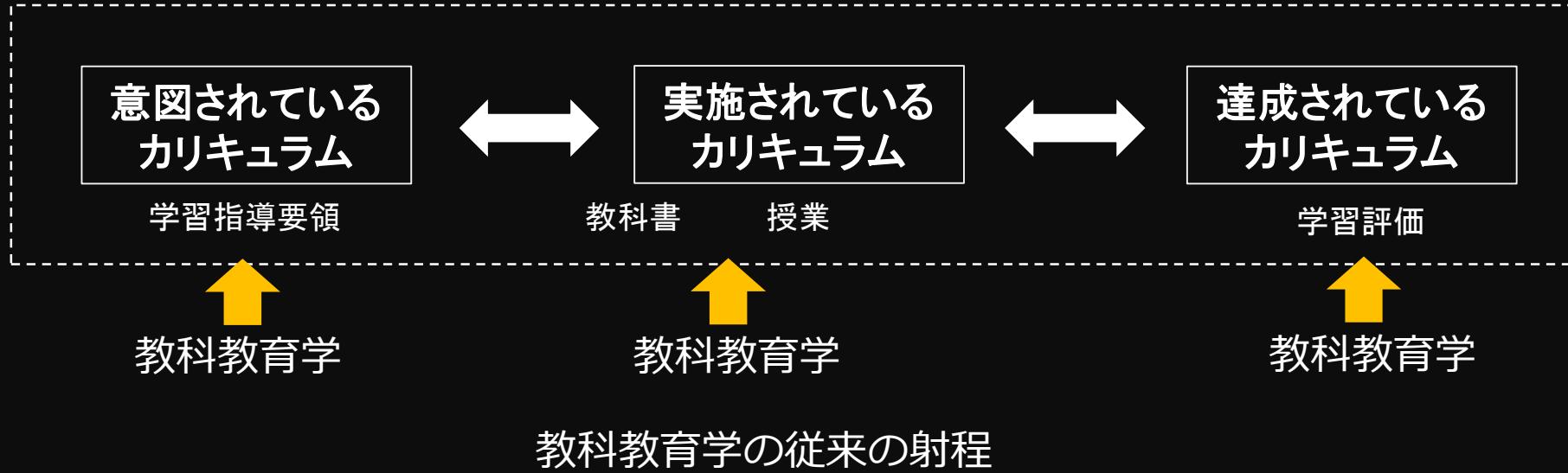


教科教育学の射程

東京学芸大学
西村圭一

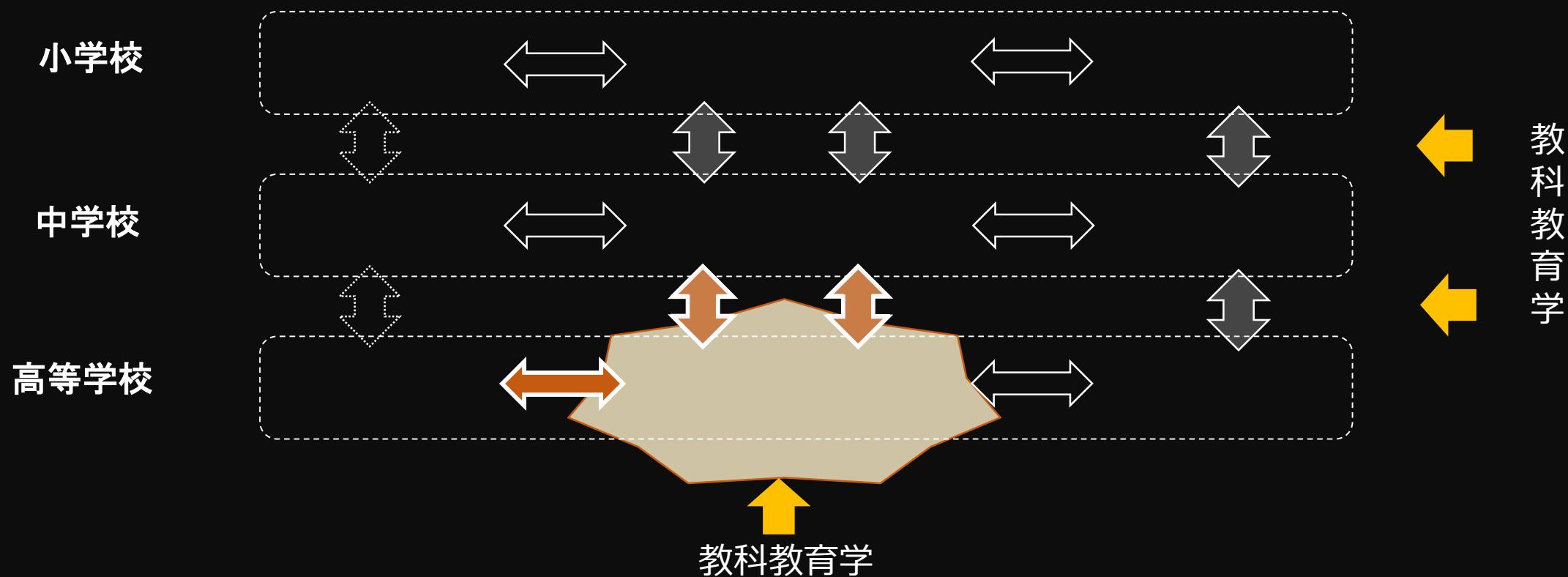
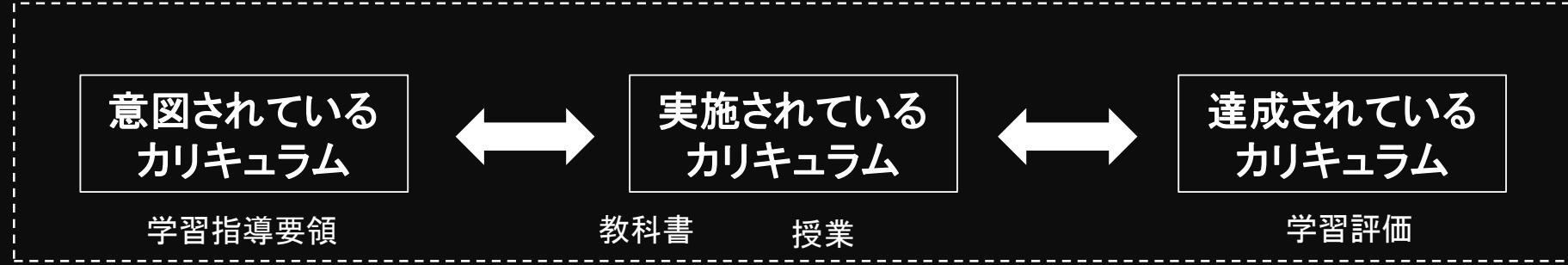
評価の対象は？



アラインメント研究
互いに整合的に連携して機能しているかを学術的に分析・評価

移行期における学校数学カリキュラムのア
ライメントに関する総合的研究
(清水美憲研究代表, 2020－)

半歩引く



| 学習指導 要領 | 科目編成 |
|------------|--|
| S53 | 数学 I (必修) 数学 II / 代数・幾何, 基礎解析 微分・積分, 確率・統計 |
| H1 | 数学 I (必修), 数学 II , 数学 III 数学A, 数学B, 数学C |
| H11 | 数学 I / 数学基礎 (選択必修) 数学 II , 数学 III 数学A, 数学B, 数学C |
| H21 | 数学 I (必修), 数学 II , 数学 III 数学A, 数学B, 数学活用 |
| H30 | 数学 I (必修), 数学 II , 数学 III 数学A, 数学B, 数学C |

コアオプション

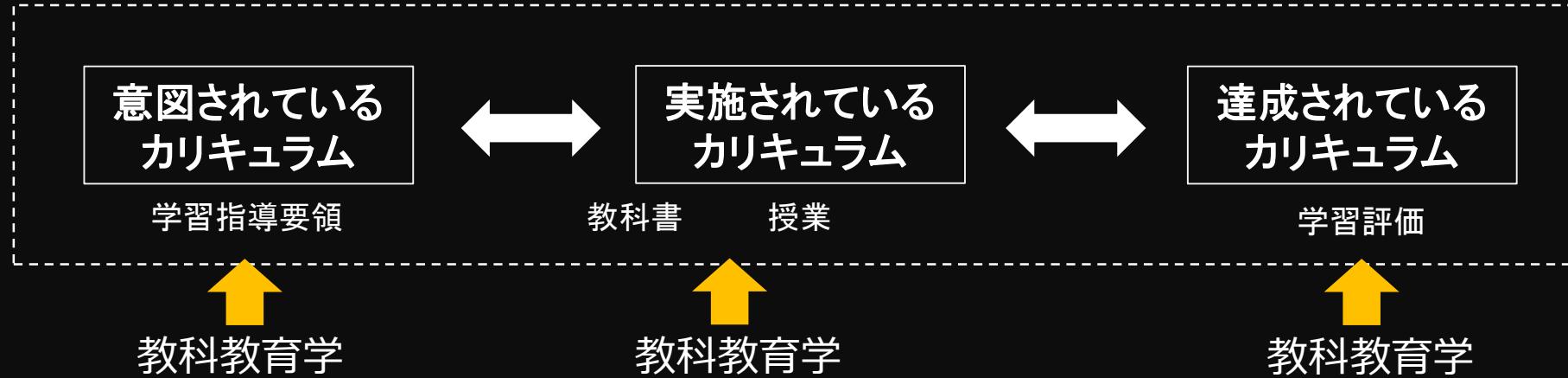
- 個数の処理
イ 自然数の列

課題学習

- 整数の性質
- 図形の性質 – 作図

ベクトル VS 統計 驚動

一步引く

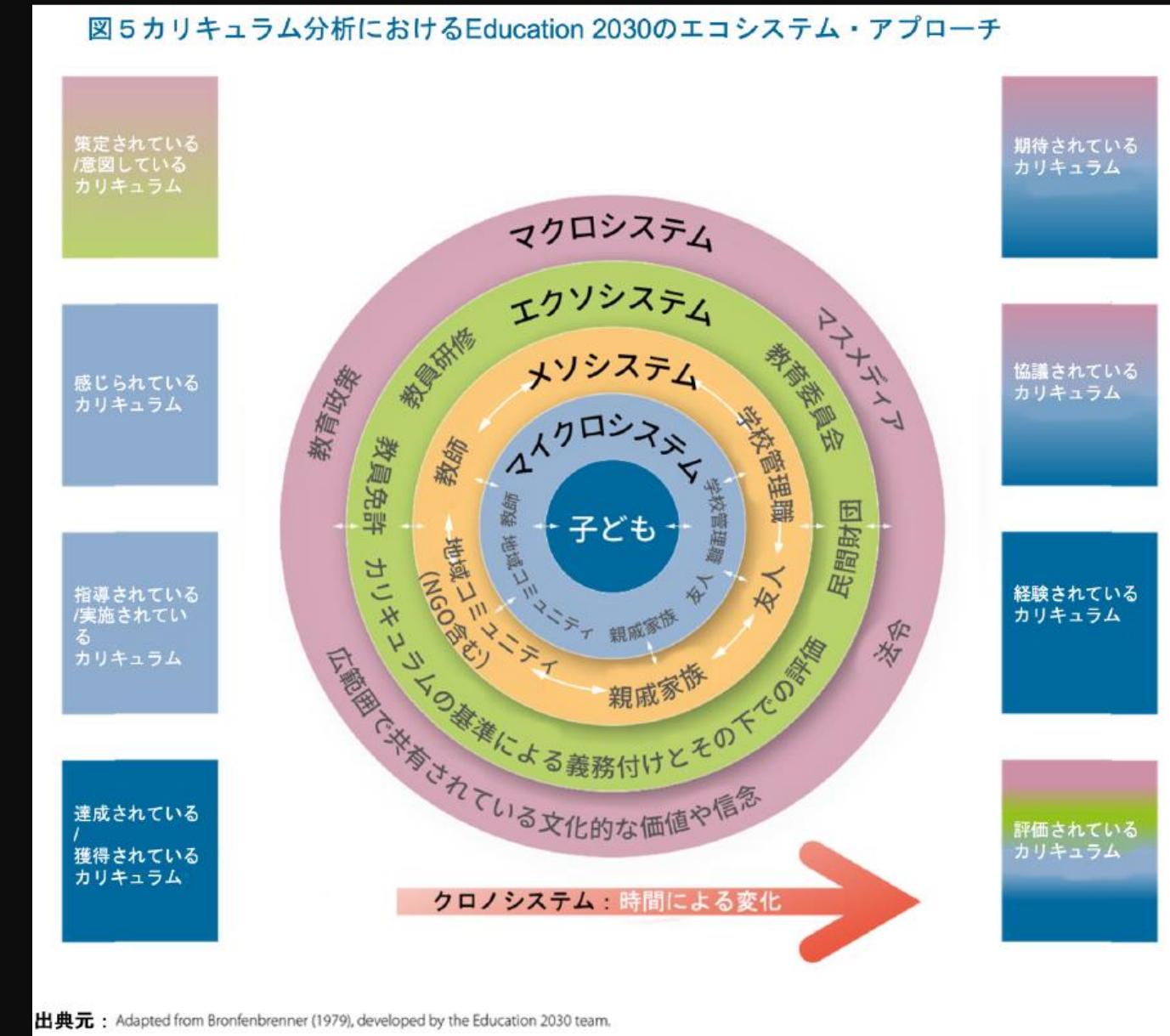


...教科の専門家は、教科の特定分野をカリキュラムに残し、その内容が拡大されるように政策立案者に対して圧力をかけるかもしれません。このような利益団体は、教科の内容が削減されたり、削除されたりすることで、自分たちの職の安定や政策への影響力が脅かされると認識している可能性があります。
(OECD, 2020, **Curriculum Overload A Way Forward**, p.67)

そもそも、子どもが主体的に学べる内容や量なのか（最終的な受益者である子どもたちの受け止めやWell-being）

学習指導要領全体に対する
「調整」はお任せ？

もう一步引く



期待されているカリキュラム

expected curriculum

(保護者、子ども、教師、学校管理職、雇用者や地域コミュニティの人々を含む) ステークホルダーが、意図されているカリキュラムはどうあるべきか、子どもたちが何を学ぶべきか、どのように成長すべきか、そしてどう行動すべきかに対して持つ期待や考え方

協議されているカリキュラム

negotiated curriculum

カリキュラムが実施される前に政策立案者や教師たち、そして子どもたちが互いに協議するプロセス

感じられているカリキュラム

perceived curriculum

学校管理職や教師たちがどのようにカリキュラムを感じ取り、そのカリキュラムをどのように解釈し、理解するか

経験しているカリキュラム

experienced curriculum

子どもたちが感じ、そして実際に経験しているカリキュラム

把握されているカリキュラム

assessed curriculum

子どもたちの学びの一部をつかむようデザインされた評価assessmentの実践を通して明らかになる学びの実態

評価されているカリキュラム

evaluated curriculum

モニタリングと評価を含む、カリキュラムに対する全体的な評価のデザインと実施

「公式の導出過程が大事」

教育のエコシステム

カリキュラム改革は教育システムにおいて最も政治的な機微に左右されハイステイクスなもの一つです。そのため、**改革の期待を上回る強い抵抗力で押し返されるのが通常です。**カリキュラムは子どもたちが学校で何を学ぶべきかについて様々な意見が集まる「みんなの関心事」として捉えられています。**カリキュラムの変更は直接的に関わる教師たちと子どもたち以外にも教育界に関わる多様な団体の利益と関連しています。**保護者も自分の子どもが何を学ぶべきかについて知りたいと強く希望しています。研究者は子どもがどの年齢で何を学ぶべきかについて見識を持っており、また大学も学校を卒業した時点で子どもたちが何をこなせるべきかに関する期待を抱いています。更に企業も子どもたちが就職した時点で何ができるようでなければならぬかの要求を持っており、また政治家も選挙戦でカリキュラムにどのような変革を成し遂げるかについて公約したかもしれません。

幅広いステークホルダーからの合意を得ることや、対立または矛盾する見解を乗り越えることが困難な場合には、カリキュラムのリ（再）デザインの最終的な受益者として意図されている**子どもたちとその包括的な発達を全員に思い起こさせることが重要**です。そのためには、子どもたちの声を積極的に取り入れ、カリキュラム内容の計画に参加させ、子どもたちの学習や最終的なウェルビーイングをどのようにして向上させることができるのかについての懸念やアイディアを提起してもらうことが前進のために重要です。

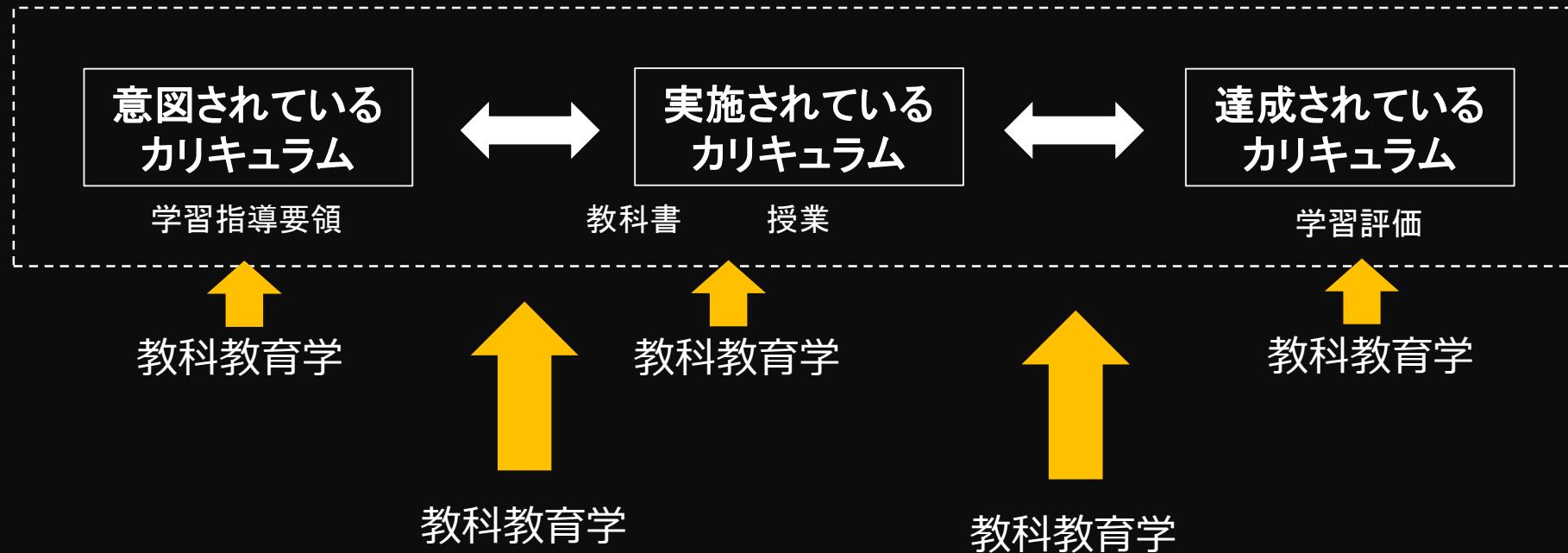
「多ければ多いほど良い」という考え方から脱却して、子どもたちのウェルビーイングを包含し、カリキュラム改革や教育全体の中心に据えることで、子どもたちの成功を再考・再定義することができます。このような再定義は、適切にバランスの取れたカリキュラムが子どもたちのウェルビーイングのために最善であるということが認識されることで社会の文化的変化をもたらし、それ故にステークホルダーの優先事項の変化にもつながるでしょう。

エコシステムの中で、学習指導要領が整合的に連携して機能しているかを評価することは教科教育学の射程外か？

学校における子どもの学びにもっとも近いところに位置している私たち（教科教育学）が、やれること、やるべきことがあるのではないか。

「べき論」「改革ありき」ではなく、
エコシステムの中で、
子どもや教師の過負担なく実装可能か？

多くの子どもたちの学びが
本当に変わるのか？



アライメント研究
互いに整合的に連携して機能しているかを学術的に

引用文献

- OECD(2020). Curriculum (re)design, A series of thematic reports from the OECD Education 2030 project OVERVIEW BROCHURE.
 - 日本語訳が下記にあります。
 - https://43e409d9-58c2-4df5-914a-1959a7949ca5.filesusr.com/ugd/f3424e_a31e6080d9264349be6480bbe62327a5.pdf
- 浅野大介(2021). 教育DXで「未来の教室」をつくろう—GIGAスクール構想で「学校」は生まれ変われるか. 学陽書房.